

12. ^{123}I -IMP が集積を示した悪性黒色腫の一例

鈴木 賢 趙 成済 長瀬 勝也
(順天堂大・医院・放)
高野 信 有村 信一 荒川 佳也
(同・中放)
山川 卓也 河村 正三 (同・耳)

今回、われわれは ^{123}I -IMP が集積した悪性黒色腫の 1 例を経験したので報告した。症例は 70 歳男性、主訴は右側頸部腫脹、右鼻出血、右副鼻腔、右上顎洞を占め骨破壊を伴う広範囲な腫瘍で右側頸部リンパ節腫大も認められた。 ^{123}I -IMP シンチグラムにて病変部に集積を認め、集積は ^{123}I -IMP 静注 30 分後像から 48 時間後像まで認められた。本症例のほかに左副鼻腔部の 1 例、脈絡膜部の 3 例について ^{123}I -IMP シンチグラムを施行したが集積は認められなかった。集積を認めた本症例では delay scan (3 時間以降) が適当と考えられた。

13. 悪性黒色腫における ^{123}I -IMP シンチグラフィ (第 2 報)

養島 聡 宇野 公一 吉川 京燦
有水 昇 (千葉大・放科)
小林まさ子 藤田 優 岡本 昭二
(同・皮膚)
佐藤 和一 植松 貞夫 (同・放部)

今回われわれは、悪性黒色腫症例において、ほぼ同時期に施行し得た ^{123}I -IMP (IMP), ^{67}Ga -citrate (Ga), $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP (bone) シンチグラフィを比較し、それぞれの役割を検討した。

対象は 17 症例で、対象部位は他の検査、生検、手術により悪性黒色腫病巣と確認された 48 部位 (骨転移巣 13 部位) である。IMP シンチグラフィは静注直後、4 時間後の 2 回撮像を行った。IMP シンチグラフィの異常集積は 5 段階評価で行い、病巣部位の情報なしに異常集積を指摘できる部位を陽性とした。

その結果、肺病変では Ga の陽性率が IMP より高く、リンパ節、肝については、2 者とも同等であった。骨に関しては今回検討した部位が進行した病巣であったためか、3 者ともに同程度であった。皮膚・粘膜病変は IMP の方が Ga より優れていた。したがって IMP は原発巣

摘出術前症例に、Ga は術後遠隔転移検索に有用であると思われた。

14. 脾の ECT, X 線 CT との比較

村上 康二 安河内 浩 李 敬一
奥畑 好孝 谷部 正法 古賀 雅久
白土 誠 (帝京大・放)

脾疾患の疑われる 26 例に対して X 線 CT, および ^{75}Se -セレンメチオニンによる脾シンチグラフィを施行し、両者の有用性について比較検討した。診断は予備情報を持たない 4 人の診断医がおのおの独立してフィルムを読み、疾患の有無の可能性別に 4 段階の Score とした。

その Score を患者別に平均、標準偏差を求め、診断の評価をした。結果は、以下のとおりである。

- 1) X 線 CT の脾癌および脾炎の診断に対して、脾シンチグラフィよりも感度、特異度とも優れる。
- 2) Conventional Image に SPECT を追加すると多少形態的な情報が加わるが、診断能を改善することはあまり期待できない。
- 3) 腫瘍を疑う場合は脾シンチグラフィを併用した方が診断能はいくぶん向上することが示唆される。
- 4) X 線 CT は脾シンチグラフィよりも診断医による読影診断の差が小さい。

15. ウロキナーゼ局所動注療法で加療した腎動脈塞栓症の腎シンチグラフィについて

宇都宮拓治 藤野 淡人 横田 真二
石橋 晃 (北里大・泌)
村田晃一郎 草野 正一 (同・放)

今回われわれは、ウロキナーゼ局所動注療法により加療した右腎動脈塞栓症を経験し、その follow up における腎シンチグラフィの臨床的意義について検討したので報告する。症例は、67 歳主婦、腹部膨満感、臍下部痛を認め、急性胃腸炎が疑われ精査目的で当院入院となる。入院後、上腸間膜動脈塞栓症の疑いが強くなったため、血管造影を行ったところ、右腎動脈塞栓症が認められた。留置血管カテーテルよりウロキナーゼ総量 686,000 単位持続動注を行った。局所動注後、腎動脈造影にて腎動脈

枝の再開通を認めたにもかかわらず、腎シンチグラフィでは、梗塞部位の RI 分布は認められず、腎機能上改善がなかったものと思われた。以上より、ウロキナーゼ局所動注後、腎動脈枝の再開通を認めた症例においても、梗塞部腎機能の改善の有無を評価する上で、腎シンチグラフィの必要性が示唆された。

16. SPECT 像に影響を与えた機械的問題について

高松 俊道 渡辺 潤二 神宮司公二
依田 一重 石井 勝巳 中沢 圭治
松林 隆 (北里大病院・放部・核)

現在の核医学において、SPECT 診断はルーチン検査として定着し、その有用性は高く評価されている。しかし、定量性に関しては、多くの問題点を残している。今回、われわれはカメラ購入の際に、コリメータ不良によるカメラのユニフォミティ低下を体験した。カメラのユニフォミティは、SPECT の定量性に影響を与えるファクターの一つであり、その管理によっては、SPECT 診断の信頼性が大きく左右される。その意味からもカメラのユニフォミティと SPECT の関係を知ることは、管理上重要と考える。そこで数種類の吸収体をコリメータ表面に置き、カメラのユニフォミティをくずし、SPECT 像を得るファントム実験を試み、検討した

17. WHO スタンダードで規準化された LH, FSH ラジオアッセイキットの評価

小林 久江 新井 洋子(群馬大・中放・核)
富吉 勝美 井上登美夫 佐々木康人
(同・核)
伊吹 令人 (同・婦人)

下垂体性国際標準品, 1st IRP-LH (68/40), 2nd IRP-HPG (78/549) とモノクローナル抗体を用いた, IRMA Kit (スパック-S-LH キット, スパック-S-FSH キット) を検討した。

1. キットの性能は、精度、再現性、希釈回収試験とも良好であった。
2. 旧キット (LH キット「第一」、FSH キット「第一」) の測定値との相関は良く (LH $r=0.97$, FSH $r=$

0.99), 新キットの測定値は、旧キットに対し、LH 約 30%, FSH 約 90% であった。

3. 成人男子健常者の値は、LH 1.3~10.3 mIU/ml, FSH 3.1~13.3 mIU/ml であった。

4. 本キットによる測定値は、成人女子の月経周期性変動、閉経後の変化、原発性性腺障害、下垂体障害を良く反映した。

18. non-thyroidal illness における血中 Free T₄ 濃度測定法の検討

佐藤 龍次 伴 良雄 原 秀雄
九島 健二 長倉 穂積 海原 正宏
(昭和大学・三内)

NTI の血中 FT₄ 値を 4 種のキットで検討した。対象は健常者 (N) 65 例、バセドウ病 (G) 16 例、甲低症 11 例、橋本病 21 例、TBG 増多および減少症 19 例、正常妊婦 319 例、肝疾患 41 例、肺炎 7 例、脳梗塞 11 例、心疾患 15 例、糖尿病 7 例、腎疾患 3 例。方法: Amerlex M (A), RIA-gnost (R), DPC (D), EIKEN (E)。結果: いずれも再現性は 7% 以下、E では HCG と 5% の交叉性がみられた。A, D はアルブミンの影響を受けた。いずれもオレイン酸および血中脂質の影響はなかった。G では A, D に比し、R, E は高値で、他の甲状腺疾患、TBG 異常者および N では、キットによる差はなかった。妊婦は、A, D 後期で低値、R は中、後期で低値、E は初期に高値を示した。A, D は低アルブミン血症で低値、E は肝疾患で高値を示し、IgG の影響が示唆された。R では肺炎で高値を示した。NTI の血中 FT₄ 値は、低アルブミン血症、肝疾患、肺炎などで影響を受け、キットの特徴を熟知する必要がある